

十六夜

泉鏡花作

一

きのふは仲秋十五夜で、無事平安な例年にもめづらしい、一天澄渡つた明月であつた。その前夜のあの暴風雨をわすれたやうに、朝から晴れ／＼とした、お天気模様で、辻へ立つて日を禮したほどである。

おそろしき大地震、大火の爲に、大都是半、阿鼻焦土となんぬ。お月見でもあるまいが、背戸の露草は青く冴えて露にさく。廂破れ、軒漏るに

つけても、光りは身に沁む月影のなつかしさは、せめて薄ばかりも供へようと、大通りの花屋へ買ひに出すのに、こんな時節がら、用意をして賣つてゐるだらうか。覺束ながると、つかひに行く女中が元氣な顔して、花屋になれば向う土手へ行って、葉ばかりでも折つぺしよつて來ませうよ、といつた。いふことが、天變によつてきたへられて徹底してゐる。

女でさへその意氣だ。男子は働かなければならぬ。
い。ーこゝで少々小聲になるが、お互に稼がなければ追つ付かない。

既に、大地震の當夜から、野宿の夢のまださめぬ、
四日の早朝、眞黒な顔をして見舞に來た。

前に内にゐて手まはりを働いてくれた淺草ツ娘の
婿の裁縫屋などは、土地の淺草で丸焼けに焼け出さ
れて、女房には風呂敷を水びたしにして髪にかぶせ、
おんぶした嬰兒には、ねんねこを濡らしてきせて、
火の雨、火の風の中を上野へ遁がし、あとで持ち出
した片手さげの一荷さへ、生命の危ふさに打つちや
つた。何とかやーーいと呼んでさが

して、漸く竹の臺でめぐり合ひ、そこも火に追はれ
て、三河島へ遁げのびてゐるのだといふ。いつも來
る時は、縞ものゝそろひで、おとなしづくりの若い
男で、女の方が年下の癖に、薄手の圓鬘でじみづく
りの下町好みでをさまつてゐるから、姉女房に見え
るほどののだが、「嬰兒が乳を吞みますから、私
は何うでも、彼女には實に成るものゝ一口も食はせ
たうござんすから。」ーで、さしあたり仕立

ものなどの誂あつらへはないから、忽たちまち荷車にぐるまを借りて曳ひきは
じめた。――これがまた手取りてつと早い事ことには、どこ
かそこらに空車あきぐるまを見つけて、賃貸ちんかしをしてくれませ
んかと聞きくと、焼やけ原はらに突つき立たった親仁おやぢが、「か
まはねえ、あいてるもんだ、持もつてきねえ。」と
云いつたさうである。人ひとごみの避難所ひなんしよへすぐ出向でむいて、
荷物にもつの持もち運はこびをがたり／＼やつたが、いゝ立たて前まへ
になる。そのうち場所ばしよの事ことだから、別べつに
知り合あひでもないが、柳橋やなぎはしのらしい藝妓げいしやが、青山あおやまの知しる
邊へへ遁にげるのだけれど、途中とちう不案内ふあんないだし、一人ひとりぢや
可恐こはいから、兄にいさん送おくつて下くださいな、といったので、
おい、合點がってんと、乗のせるのでないから、そのまゝ荷車にぐるま
を道端みちばたにうつちやつて、手てをひくやうにしておくり
届とどけた。「別嬪べつびんでござんした。」たゞでもこの
役やくはつとまる所ところをしみ／＼禮れいをいはれた上うへに、
「たんまり御祝儀ごしうぎを。」とよこれくさつた半纏はんてんだ
が、威勢あせいよく井いをたゝいて見みせて、「何なに、何なにをし
たつて身み體たいさへ働はたらかせりや、彼女あれに食くはせて、乳ちは
のまされます。」と、仕立屋したてやさんは、いそ／＼と
歸かへつていった。――年季ねんきを入いれた一いばしの居職あじよく
がこれである。

それを思ふと、机に向つたなりで、白米を炊いて
たべられるのは勿體ないと云つてもいゝ。非常の場
合だ。
稼がずには居られない。

社にお約束の期限はせまるし、
實は十

五夜の前の晩あたり、仕事にかゝらうと思つたので
ある。所が、朝からの吹き降りで、日が暮れると警
報の出た暴風雨である。電燈は消えるし、どしや降
りだし、風はさわぐ、ねずみは荒れる。

急ごしらへの油の足りない白ちやけた提灯一具に、
小さくなつて、家中が目ばかりばち／＼として、陰
氣に滅入つたのでは、何にも出来ず、口もきけない。
拂底な蠟燭の、それも細くて、穴が大きく、心は暗
し、數でもあればだけれども、秘藏の箱から

出して見た覚えはないけれど、寶石でも取出す
やうな大切な、その蠟燭の、時よりも早くぢり／＼
と立つて行くのを、氣を萎して、見詰めるばかりで、
かきもの所の沙汰ではなかつた。

戸をなぐりつける雨の中に、風に吹きまはされる野分聳して、「今晚——十時から十一時までの間に、颶風の中心が東京を通過するから、皆さん、お氣を付けなさるやうにといふ、たゞ今、警官から御注意がありました。——御注意を申します。」と、夜警當番がすぐ窓の前を觸れて通つた。

さらぬだに、地震で引傾いでゐる借屋である。颶風の中心は魔の通るより氣味が悪い。——胸を引緊め、袖を合せて、ゐすくむと、や、や、次第に大風は暴れせまる。——しきり、——しきり、たゞ、辛き息をつかせては、ウゝゝゝ、ヒューとなりを立てる。浮き袋に取付いた難破船の沖のやうに、提灯一つをたよりにして、暗闇にたゞよふうち、さあ、時かれこれ、やがて十二時を過ぎたと思ふと、氣の所爲か、その中心が通り過ぎたやうに、がう／＼と戸障子をゆるする風がざつと屋の棟を拂つて、やゝ軽くなるやうに思はれて、突つ伏したのも、僅に顔を上げると、何うだらう、忽ち幽怪な

る夜陰の汽笛が耳をゑぐつて間ぢかに聞えた。

「あゝ、（ウウ）が出ますよ。」と家内があをい顔をする。――この風に――私は返事も出
来なかつた。

カチ、カチ、カゝチ
カチ、カチ、カゝチ

雨にしづくの拍子木が、雲の底なる十四日の月に
うつるやうに、袖の黒さも目に浮かんで、四五軒北
なる大銀杏の下に響いた。――私は、霜に睡
をさました劍士のやうに、付け焼き刃に落ちついて
聞きますまして、「大丈夫だ。火が近ければ、あの
音が吃とみだれる。」カチカチカゝチ。

「静かに打つてゐるのでは火事は遠いよ。」
「まあ、さうね。」といふ言葉も、果てないのに、
「中六」「中六」と、ひしめきかはす人々の
聲が、その、銀杏の下から車輪の如く軋つて來た。

續いて、「中六が火事ですよ。」と呼んだのは、
再び夜警の聲である。やあ、不可い。中六と言へば、

長い梯子なら届くほどだ。然も風下、眞下である。

私たちは黙つて立つた。青ざめた女の臉も決意に紅を潮しつゝ、「戸を開けないで支度をしませう。」

地震以來、解いた事のない帯だから、ぐいと引しめるだけで事は足りる。「度々で済みません。」

「御免なさいませよ。」と、やつと佛壇へ納めたばかりの位牌を、内中で、此ばかりは金色に、キラリと風呂敷に包む時、毛布を撥ねてむつくり起上つた。下宿を焼かれた避難者の濱野君が、

「逃げるに極めたら落着きませう。いま火の様子を。」とがらりと門口の雨戸を開けた。可恐いもの

見たさで、私もふツと立つて、框から顔を出すと、雨と風とが横なぐりに吹つける。處へ——靴

音をチャノと刻んで、銀杏の方から來なすつたのは、町内の白井氏で、おなじく夜警の當番で、

「あゝもう可うございます。漏電ですが消えました。——軍隊の方も、大勢見えてゐますから安心で

す。」「何とも、ありがたう存じます。——後、に分けて今晚は御苦勞様です。に御加勢

にまゐります。」おなじく南となりへ知らせに、白井氏のレインコートの裾の、身から

で、煽るのを、濛々たる雲の月影に見おくつた。

この時も、戸外はまだ散々であつた。木はたゞ水底の梅松の如くうねを打ち、梢が窪んで、波のやうに吹亂れる。屋根をはがれたトタン板と、屋根板が、がたん、ばり／＼と、競を迫つたり、入りみだれたり、ぐる／＼と、踊り燥ぐと、石瓦こそ飛ばないが、狼籍とした缶詰のあき殻が、カラカランと、水鶏が鐵棒をひくやうに、雨戸もたゞけば、溝端を突駈る。溝に浸つた麥藁帽子が、竹の皮と一所に、ブンと臭つて、眞つ黒になつて撥上がるか

もう、やけになつて、鳴きしきる蟲の音を合方に、夜行の百鬼が跳梁跋扈の光景で。――この中を、折れて飛んだ青い銀杏の一枝が、ざぶり／＼と雨を灌いで、波状に宙を舞ふ形は、流言の鬼の憑ものがしたやうに、「騒ぐな、おのれ等――鎮まれ、鎮まれ。」と告つて壓すやうであつた。

「私も新雜棒を持つて出て、亞鉛と一番、鎗を削つて戦はうかな。」と喧嘩過ぎての棒ちぎりで擬勢を示すと、「まあ、可かつたわね、ありがた

い。「と嬉しいより、ありがたいのが、斯うした
時の眞實で。」

「消して下すつた兵隊さんを、こゝでも拝ませ
う。」と、女中と一所に折り重なつて門を覗いた
家内に、「怪我をしますよ。」と叱られて引込
んだ。

誠にありがたがるくらゐでは足りないものである。
火は、亜鉛板が吹つ飛んで、送電線に引掛つてるのが、風ですれて、線の外被を切つたゝめに發したので。警備隊から、驚破と駈つけた兵員達は、外套も被なかつたのが多いさうである。危険を冒して、あの暴風雨の中を、電柱を攀ぢて、消しとめたのであると聞いた。――颯風の過ぎる警告のために、一人駈けまはつた警官も、外套なしに骨までぐしよ濡れに濡れ通つて――夜警の小屋で、餘りの事に、「おやすみになるのに、お着替がありますか。」といつて聞くと、「住居は焼けました。何もありません。――休息に、同僚のでも借りられゝばですが、大抵はこのまゝ寝ます。」との事だつたさうである。辛勞が察しらるゝ。
雨になやんで、葉うらにすくむ私たちは、果報といつても然るべきであらう。

暁方、僅にとりとしつゝ目がさめた。寝苦しい思ひの息つぎに朝戸を出ると、あの通り暴れまはつ

たトタン板も屋根板も、大地に、ひしとなつてへたばつて、魍魎を跳らした、ブリキ罐、瀬戸のかけらも影を散らした。風は冷く爽に、町一面に吹きしいた眞蒼な銀杏の葉が、そよ／＼と葉のへりを優しくそよがせつゝ、芬と、樹の秋の薫を立てる。

早起きの女中がざぶ／＼、さら／＼と、早、その木の葉をはく。化けさうな古箒も、唯見ると銀杏の簷をさした細腰の風情がある。――しばらく、雨ながら戸に敷いたこの青い葉は、そのまゝにながめたし。「晩まで掃かないで。」と、留めたかつた。が、時節がらである。落ち葉を掃かないのさへ我儘らしいから、腕を組んでだまつて視た。

裏の小庭で、雀と一所に、嬉しさうな聲がする。

昨夜、戸外を舞静めた、それらしい、銀杏の折れ枝が、大屋根を越したが、一坪ばかりの庭に、瑠璃淡く咲いて、もう小さくなつた朝顔の色に絶るやうに、たわ／＼に掛つた葉の中に、一粒、銀杏の實のついたのを見つけたのである。「たべられ

るものか、下卑なさんな。「なぜ、何うして？」
「いちじくとはちがふ。いくら食ひしん坊でも、
その實は黄色くならなくつては。「へい。」
と目を丸くして、かざした所は、もち手は借家の山
の神だ、が、露もこぼるゝ。枝に、大慈の楊柳の俤
があつた。

「ー」ところで、前段にいつた通り、この日はめ
づらしく快晴した。

通りの花屋、花政では、きかない氣の
爺さんが、捻鉢巻で、お月見のすゝき、紫苑、女郎
花も取添へて、おいでなせえと、やつて居た。葉に
打つ水もいさぎよい。

可し、この様子では、歳時記どほり、十五夜の月
はかゞやくであらう。打ちつゞく悪鬼ばらひ、屋を
壓する黒雲をぬぐつて、景氣なほしに「明月」
も、しかし沙汰過ぎるから、せめて「良夜」と
でも題して、小篇を、と思ふうちに 四五
人のお客があつた。いづれも厚情、懇切のお見舞で
ある。

打ち寄れば言ふ事よ。今度の大災害につけては、
先んじて見舞はねばならない、焼け残りの家の無事
な方が後になつて――類焼をされた、何とも申
しやうのない方たちから、先手を打つて見舞はれる。
壁の破れも、防がねばならず、雨漏りも留めたし、
その何よりも、火をまもるのが、町内の
義理としても、大切で、煙草盆一つにも、一人はつ
いて居なければならぬやうな次第であるため、ひ
つ込みあんに居すくまつて、小さくなつてゐるか
らである。

四

早く、この十日ごろにも、連日の臆病づかれで、寝るともなしにころががつてみると、「鏡さんはあるかい。――何は　みなさるかい。」

と取次ぎ　　といふほどの奥はない。出合はせた女中に、聞きなれない、かう少し掠れたが、よく通る底力のある、そして親しい聲で音づれた人がある。「あ、長さん。」　私は心づいて飛び出した。はたしてであつた。松本長まつもとながし

一

この能役者は、木曾の中津川に避暑中だつたが、猿樂町の住居はもとより、寶生の舞臺をはじめ、芝の琴平町に、意氣な稽古所の二階屋があつたが、それもこれも皆灰燼して、留守の細君　――（評判の賢婦人だから厚禮して）　――　御新造が子供たちを連れて辛うじて火の中をのがれたばかり、何にもない。歴乎とした役者が、ゴム底の足袋に巻きゲートル、ゆかたの尻ばしよりで、手拭を首にまいてやつて来た。「いや、えらい事だつたね。　――

今日も焼けあとを通つたがね、學校と病院に火がかゝつたのに包まれて、駿河臺の、あの崖を攀ぢ上つて逃げたさうだが、よく、あの崖が上られたものだと思ふよ。ぞつとしながら、つく／＼見たがね、上がらうたつて上がれさうな所ぢやない。女の腕に大勢の小兒をつれてゐるんだから　――　いづれ人さ、誰かゞ手を取り、肩をひいてくれたんだらうが、私は神佛のおかげだと思つて難有がつてゐるんだよ。

――　あゝ、装束かい、皆な灰さ　――　面だけは近所のお弟子が駈けつけて、残らずたすけた。百幾つといふんだが、これで寶生流の面目は立ちます。

装束は、いづれ年がたては新しくなるんだから。」

と蜀江の錦、呉漢の綾、足利絹もものともしないで、「よそぢや、この時節、一本お爛でもないからね、ピールさ。久しぶりでいゝ心持だ。」と熱爛を手酌で傾けて、「親類うちで一軒でも焼けなかつたのがお手柄だ。」といつて、うれしさうな顔をした。うらやましいと言はないまでも、結構だともいふことか、手柄だといつて讃めてくれた。

私は胸がせまつた。と同時に、一藝に達した、いや

――　從兄弟だからグツと割びく　――　たづさ

はるものゝ意氣を感じた。神田兒だ。彼は生拔きの江戸兒である。

その日、はじめて店をあけた通りの地久庵の蒸籠をつる／＼と平げて、「やつと蕎麥にありついた。」と、うまさうに、大胡坐を搔いて、また飲んだ。

印半纏一枚に焼け出されて、いさゝかもめげないで、自若として胸をたゝいて居るのに、なほ万ぢやんがある。久保田さんは、まる焼けのしかも二度目だ。さすがに淺草の兄さんである。

つい、この間も、水上さんの元禄長屋、いや邸（註、建つて三百年といふ古家の一つがこれで、もう一つが三光社前の一棟で、いづれも地震にびくともしなかつた下六番町の名物である。）へ泊りに来てゐて、寝ころんで、誰かの本を讀んでゐた雅量は、推服に價する。

ついて話しがある。

（猿どのゝ夜寒訪ひゆく兎

かな) で、水上さんも、私も、場所はちがふが、
両方とも交代夜番のせこに出てゐる。町の角一つへ
だてつゝ、「いや、御同役いかゞでござるな。」
と互に訪ひつ訪はれつする。私があけ番の時、宵
のうたゝねから覺めて辻へ出ると、こゝにつめてゐ
た當夜の御番が「先刻、あなたのところへお客があ
りましてね、門をのぞきなさるから、あゝ泉をおた
づねですかと、番所から聲を掛けますと、いや用で
はありません。――番だといふから、ちよつと見
に來ました、といつてお歸りになりました。戸をあ
けたまゝで、お宅ぢやあ皆さん、お寝みのやうでし
た。」との事である。

「どんな人です。」と聞くと、「さあ、はつ
きりは分りませんが、大きな眼鏡を掛けておいで
した。」あゝ、水上さんのところへ、今夜も泊りに
來た人だらう、万ちゃんだな、と私はさう思つた。
久保田さんは、大きな眼鏡を掛けてゐる。――
所がさうでない。來たのは瀧君であつた。評判のあ
の目が光つたと見える。これも讃稱にあたひする。

五

「――さてこの日、十五夜の當日も、前後してお客様が歸ると、もうそちこち晩方であつた。」

例年だと、その薄が、高樓　――もちとをかし
いが、この家で二階だから高いにはちがひない。その月の出の正面にかざつて、もと手のかゝらぬお團子だけは堆く、さあ、成金、小判を積んで較べて見ると、飾るのだけれど、ふすまは外れる。障子の小間はびり／＼と皆破れる。雑と掃き出したばかりで、煤もほこりも其のまゝで、まだ雨戸を開けないで置くくらゐだから、下階の出窓の下、すゝけた簾ごしに供へよう。お月様、おさびしうございませうかと、飾る。その小さな臺を取りに、砂で氣味の悪い階子段を上がると、　　ブンとにほつた。焦げるやうなにほひである。ハツと思ふと、かう氣のせゐか、立てこめた中に煙が立つ。私はバタ／＼と飛びおりた。「ちよつと来て見ておくれ、焦げくさいよ。」　　家内が血相して駈けあがつた。「漏電ぢやないか知ら。」　　――一日の地震以

來、たばこ一服、火の氣のない二階である。「疊をあげませう。濱野さん 御近所の方、おとなりさん。」「騒ぐなよ。」とはいったけれども、私も胸がドキ／＼して、壁に頬を押しつけたり、疊を撫でたり、だらしはないが、火の氣を考へ、考へつゝ、雨戸を繰つて、衝と裏窓をあけると、裏手の某邸の廣い地尻から、ドス黒いけむりが渦を巻いて、もう／＼と立ちのぼる。「湯どのだ、正體は見届けた、あの煙だ。」といふと、濱野さんが鼻を出して、嗅いで見て、「いえ、あのにほひは石炭です。一つ嗅いで來ませう。」と、いふことも慌てながら戸外へ飛び出す。――近所の人たちも、二三人、念のため、スヰツチを切つて置いて、疊を上げた、が何事もない。「御安心なさいまし、大丈夫でせう。」といふ所へ、濱野さんが、下駄を鳴して飛んで戻つて、「づか／＼庭から入りますとね、それ、あの爺さん。」といふ、某邸の代理に夜番に出て、あねむりをしい／＼、むかし道中をしたといふ東海道の里程を、大津からはじめて、幾里何町と五十三次、徒歩で饒舌る。安政の地震の時は、おふくろの腹にゐたといふ爺さん

が、「風呂を焚いておましてね、何か、嗅ぐと矢つ張り石炭でしたが、何か、よくきくと、たきつけにふるしんぶん古新聞と塵埃を燃したさうです。そのにほひが籠つたんですよ。大丈夫です。――爺さんにいひますとね、「氣の毒でがんしたのう。」といつておました。」箱根で煙草をのんだらうと、笑ひですんだから好いものゝ、薄に月は澄ながら、胸の動悸は静まらない。あいにくとまた停電で、蠟燭のあかりを借りつゝ、燈と共に手がふるふ。

なか／＼に稼ぐ所ではないから、いきつきに表へ出て、近所の方に、たゞ今の禮を立話してして居ると、人どよみを哄とつくつて、ばら／＼往來がなだれを打つ。小兒はさけぶ。犬はほえる。何だ。何だ。地震か火事か、と騒ぐと、馬だ、馬だ。何だ、馬だ。主のない馬だ。はなれ馬か、そりや大變と、屈竟なまでの、軒下へバツと退いた。放れ馬には相違ない。引手も馬方もない畜生が、あの大地震にも縮まない、長い面して、のそり／＼と、大八車のしたゝかな奴を、たそがれの堀の片暗夜に、人もなげに曳いて伸して来る。重荷に小づけとはこの事だ。その癖、車は空である。

が、嘘か真か、本所の、あの被服廠では、つむじ風の火の裡に、荷車を曳いた馬が、車ながら炎となつて、空をきり／＼と廻つたと聞けば、あゝ、その馬の幽霊が、車の亡魂とゝもに、フト迷つて顯はれたかと、見るにももの凄いまで、この騒ぎに持ち出した、軒々の提灯の影に映つたのであつた。

かういふ時だ。在郷軍人が、シャツ一枚で、見事に轡を引留めた。が、この大きなものを、せまい町内、何處へつなく所もない。御免だよ、誰もこれを預からない。そのはずで。然うかといつて、どこへ戻す所もないのである。少しでも廣い、中六へでも持ち出すかと、曳き出すと、人をおどろかしたにも似ない、おとなしい馬で、荷車の方が暴れながら、四角を東へ行く。

酔つ拂つたか、寝込んだか、馬方め、馬鹿にしゃがると、異説、紛々たる所へ、提灯片手に息せいで、馬の行つた方から飛び出しながら「皆さん、晝すぎに、見付けの米屋へ来た馬です。あの馬の面に見覚えがあります。これから知らせに行きます。」

と、商家しやうかの中僧ちゆうそうさんらしいのが、馬士まごに覚えおぼ、とも
言いはないで、呼よばはりながら北きたへ行ゆく。

町内ちやうない一いぱいのえらい人出ひとでだ、何なんにつけても騒さう々く
い。

かう何どうも番ばんごとどしんと、駭おどるかされて、一いち々く
びく／＼して居あたんでは行やり切きれない。さあ、もつ
て来こい、何なんでも、と向むかう顛はちまき巻まきをした所ところで、馬うまの前まへへ
は立たたれはしない。

夜よふけて、ひとり澄すむ月つきも、忽たちまち暗くらくなりはしな
いだらうか、眞ま赤つかになりはしないかと、おなじ不安ふあん
に夜よを過すごした。

その翌日よくじつ 一い一い十六夜いざよひにも、また晚方ばんがた強震きやうしんがあ
つた 一い一い おびえながら、この記きをつゞる。

時ときに、こよひの月つきは、雨空あまぞらに道行みちゆきをするやうな
のではない。かう／＼しく、そして、やさしく照てつ
て、折をりしもあれ風かぜ一いしきり、無慙むざんにもはかなくな

つた幾萬いくまんの人ひとたちの、焼やけし黒髪くろかみかと、散ちる柳やなぎ、焦こ
げし心臓しんざうかと、落おつる木この葉はの、宙ちゆうにさまよふと見み
ゆるのを、撫なで慰なぐさむるやうに、薄霧うすぎりの袖そでの光ひかりを
長ながく敷しいた。

【完】